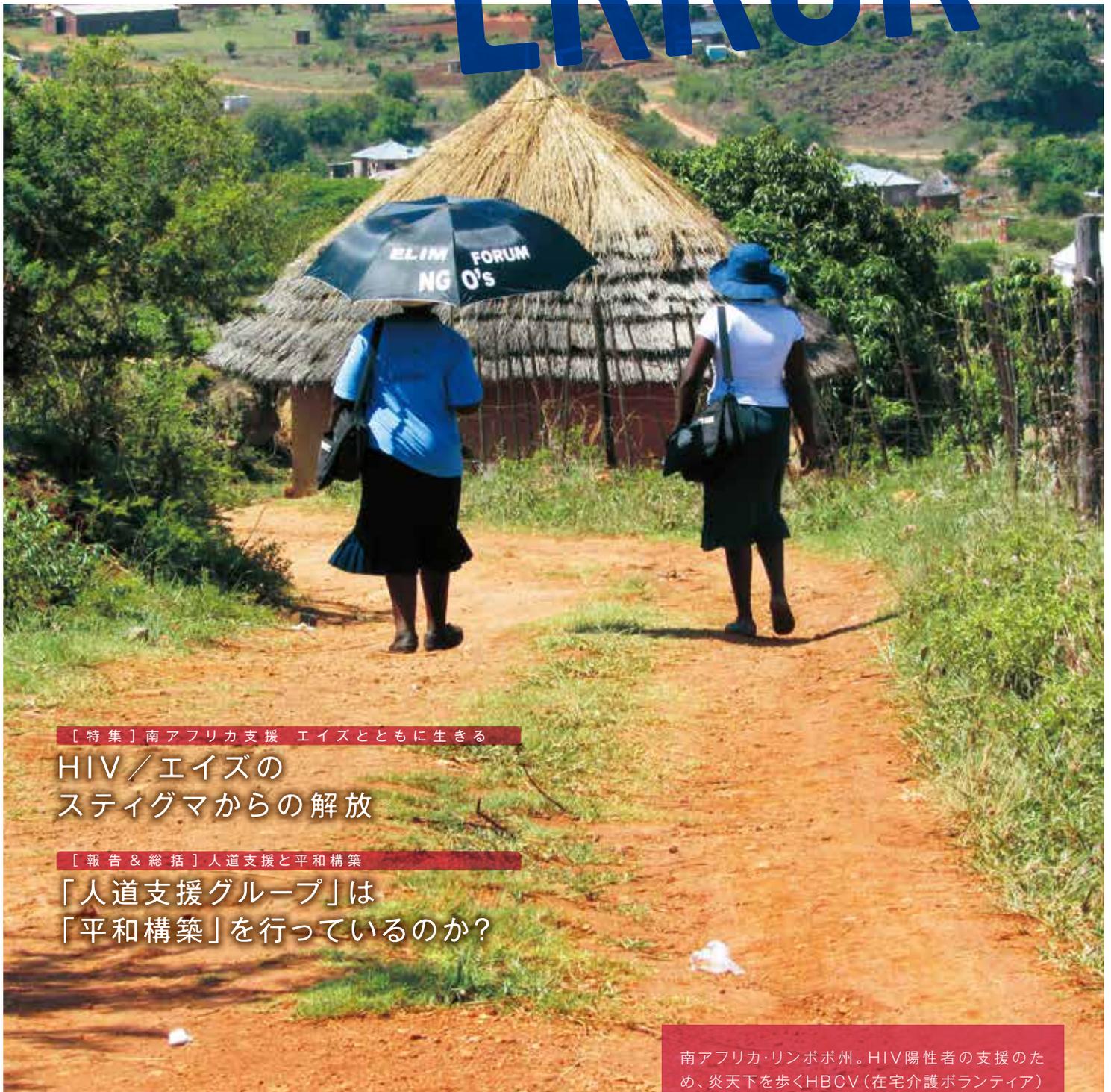


TRIAL &

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

ERROR



【特集】南アフリカ支援 エイズとともに生きる

HIV／エイズの
スティグマからの解放

【報告 & 総括】人道支援と平和構築

「人道支援グループ」は
「平和構築」を行っているのか？

南アフリカ・リンボポ州。HIV陽性者の支援のため、炎天下を歩くHBCV（在宅介護ボランティア）たち。雨の日も風の日も、毎日村を歩いて患者宅を訪問することで、厚い信頼を得ている。



[特集] 南アフリカ支援 エイズとともに生きる ■■■■■■■■■■

HIV / エイズの スティグマからの解放

人口の1割強の約610万人ものHIV陽性者を抱える南アフリカ。JVCは貧困州の一つリンポポ州でHIV / エイズに関する活動を展開してきた。果たして今、HIV陽性者が、スティグマ(社会的な烙印)から解放され、人生に前向きに歩き出し、地域の子どもを守るため地域の大人が立ち上がっている。国際的には、昨年の国連総会で採択された、貧困終焉を目指す「持続可能な開発目標(SDGs)」が南アのHIV対策にどう影響するかも注目される。これまでの活動と展望を整理したい。



座談会。
大人も子どもも行動変容を見せた3年間
南アフリカ事業担当 渡辺 直子

2012年度に始まったリンポポ州での「住民参加型HIV / エイズ予防啓発活動およびHIV陽性者支援強化プロジェクト」は15年度で3年間の事業期間を終了した(17年度まで延長)。この間、陽性者と地域のケアボランティアとに信頼が生まれ、HIV検査を前向きに受ける男性が増え、子どもを守ろうと地域関係者が動き始めた。それら変容を見てきた3人の現地スタッフが展望を語った。

子どもにも行動変容が

渡辺 活動を通じてどのような変化や成果がみられた？

ドウドウ 患者とHBCV(注1)の信頼関係ができた。HBCVが研修で情報を得て、伝えることが地域住民の信頼につながり、住民がHIV / エイズの相談に来るようになったのは大きい。DIC(注2)でも子どもの保護者がDIC

V(注3)を信頼し、積極的にDICに子どもを送るようになった。

モーゼス エイズへのイメージも変わった。DICVにHIV / エイズについて質問しに来る人も出てきた。とくに予防啓発キャンペーン効果は大きい。男性は、クリニックで検査を受けることが怖い。でもキャンペーンを通じ多くの男性が検査を受けた。そこから薬を飲み、自分をケアできるようになる。

◎注1…HBCV : Home Based Care Volunteer / 在宅介護ボランティア
◎注2…DIC : Drop in Center / 子どもケアセンター
◎注3…DICV : Drop in Center Volunteer / 子どもケアボランティア



児童虐待について学ぶDICV(子どもケアボランティア)。出稼ぎや亡くなったなどの理由で親が不在の家庭も多いなか、子どもたちの虐待が課題であるとして、DICVからのリクエストで研修を実施した。

フィリップ 子どもにも行動変容が見られる。DICVで「今日誰々はARVs(注4)を取りに病院に行った」などDICVに伝えるようになった。子どももHIV/AIDSの情報をやりとりしている。ドウドウ HIV陽性者の変化もそう。研修で、適切な服薬が必要な理由と方法を学ぶだけで、健康状態の劇的な改善例が複数見られた。その結果、自分の感染とHIV/AIDSに関する情報を隠さず伝えることで、いざ発病時に周りの人から適切なサポートを得ている。研修参加者は全員、自分のことを自分で考え対処できる強さを身につけた。

残された課題は

渡辺 行動変容が見られたことはすごいよね。残された課題は？

モーゼス 15〜18歳の若者が難しく、DICVに来る数も増えない。

ドウドウ 10代妊娠率が非常に高

い。つまり感染予防していない。菜園研修を経て、食料自給する人が出てきた一方、貧しい人ほど家に食べ物が無いのに「あれは貧しい人が行うもの」との引け目みたいなものから菜園をやらない。

CBO(注5)との協働も課題。HBCVは、保健省から手当をもらっており、それを気にするあまり住民ニーズに目を向けないと指摘される。でもCBOとの協働は必要で、時間がかかると理解すべき。東ケープ州(注6)では成果が出て根付くのに10年要した。

モーゼス CBOの持続性も課題。DICVにはシングルマザーも多いが、村のために働くのに手当がない(注7)。辞める人もいる。

ドウドウ アパルトヘイト後の政府は、貧困削減を謳い、「あげてあげてあげまくる」政策を行った。結果、人びとは外から来る人はお金やモノと一緒に来ると思うようになってしまった。そうしたなかで、活動を理解する個人を見つけ

◎注4…ARVs: 抗レトロウイルス薬(通称:エイズ治療薬) ◎注5…CBO: Community Based Organization / 村・地域に根差した団体 ◎注6…JVCが1990年代末~2009年度まで環境保全型農業普及事業をしていた。 ◎注7…本来、国からの手当てはあるが、行政の資金管理能力不足で支払われていない。



るのが重要。例えば菜園研修を受けた女性は、参加日当が出る政府関係の研修に行くのをやめた。自分の菜園に集中し、自分で生活を改善している。こういう人がいれば、JVCが去った後も活動もたらしたものが残っていく。

子どもたちに生きる術を

渡辺 今後取り組みたいことは？
ドウドウ 子どもや若い人。子どもの周りはすごいスピードで様々なことが起きていて、それに対応

する術、生きるために必要な知恵を伝えることが必要。出稼ぎ社会の南アでは、大人が村を離れていてそれが難しいから、子どもが互いに学び合える環境をつくること。そのほうが子どもにも言葉が届く。
フィリップ 学校と協働の菜園づくりも重要。子どもは野菜など食べ物はスーパーで得られると思っているが、食べ物はどう作られているかを学校で実践も交え学ぶことで、その考えも変わるはず。

「外」のNGOの役割とは

渡辺 そこで、南アの外から来るNGOにできることはまだある？
ドウドウ 外からNGOが来ると、この社会の何が課題かに気付く。私もJVCと出会うまで、南アの多くの問題を意識しなかった。例えば、貧困はそこらじゅうにあるのに、多くの人が格差の背景の様々な要因を知らない。また、私たちは「助け合うこと」を失いつ



つある。小さい頃はアパルトヘイト下で貧しくても、近所の人が何も食べてないのを知りながら自分だけ食べはしなかった。でも最近他人を構っていられず、頼るのは自分だけ。このメンタリティは、外から来た情報やスキルで自分が変わると世界が変わり、変化する。

南アフリカ人としての役割

渡辺 そうしたなかで自分たちが果たすべき役割を考えたことは？
モーゼス JVCで活動してから

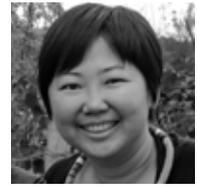
村の子どもの安全に関心をもった。だから、フィリップと村でサッカーチームづくりを始めた。最初は困難だらけ。集まったのは自分たち2人と子ども4人だけ（笑）。でも諦めなかった。村をこうしたいとのビジョンがあったから。そのうち、メンバーの子どもが他の子呼び始めて広がった。少しでも理解する人が現れたら、強力なサポーター、推進役になってくれることを示した事例だ。

渡辺 最後にJVCをサポートしている方々へメッセージを。
モーゼス 支援が人びとに変化をもたらした。支援を続けてほしい。
ドウドウ 南アが安定した社会になるには時間がかかる。一人の子どもの小さな変化がその後の子どもたちの大きな変化につながる。活動に関心を持ち続けてほしい。
フィリップ 私もJVCの支援と活動で変容できた（学校菜園実施時の研修生だった）。サポートしてくださる方には心から感謝します。

なお、座談会は2時間以上に及んだため、本稿で紹介できたのはほんの一部です。全文はJVCのホームページで公開しています。



子どもたちに、みんなで行う動物の名前あてゲームを説明するチャウケさん。人前でこんなに堂々と話すことは過去にはできなかった。



南アフリカプロジェクト・マネージャー 富田 杏子

JVCの活動で
得たことを伝えたい！

今回の報告をまとめるにあたり、活動に関わった人たちから聞き取り調査を行った。そのなかから印象的な2人の女性のエピソードを紹介する。どちらにも、HIV/AIDS問題に取り組みうちに、自身と地域の人びとに生きがいが生まれ、信頼関係が構築されたことへの充足感がうかがえる。

グレース・チャウケさん(35)
ヒヤンガニ村ドロップインセンター(DIC)
ボランティア

グレースさんは14年から活動開始。とくに物静かだった彼女は今、5、11歳の子ども向けプログラム責任者として活躍しています。

「父が早くに家を
出てしまい、私は
母の働く農場で育

ちました。通ったり通わなかったりの学校も、16歳の妊娠でついにやめました。それから3人の子どもを抱えた生活は不安定。DICでもボランティアを始めたのは家族を養うためでした。でも、今では生きがいを見つけたと感じています。

研修で、お金やモノがなくても、子どもに時間を与え、よく聞き話すことで子どもの成長を支えることができると気づきました。かつて怒鳴ることも多かった私が態度を変えてから、子どもたちが話を



JVC過去の事業地、東ケープ州を訪問したマシャウさん(中央)。さまざまな人びととの交流がモチベーションにつながり、自分の経験を伝えることが成長につながると話す。

フロレンス・マシャウさん(54)
ボドウェ村 菜園ファシリテーター

聞き相談に来るようになりました。子どもたちには、私と同じ辛い思いをしてほしくない。そのためにも胸を張って自分の経験を話し、多くの子どもとの相談に乗りたい。また、私が変われたように、地域の大人の意識も変えるべく活動を続けていきたいです」

テーターとして活躍を始めたフロレンスさんは言います。ドアほどの大きさから始まった菜園は今、小学校の校庭くらいの大ささになり、年間40種以上の果物、野菜、ハーブが育っています。

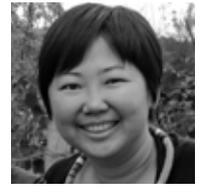
「毎日2時間は菜園で作業します。ハーブ類を育て薬の代わりに使うようになってから、高血圧で苦しんでいた夫は通院から解放されました。小学生の孫が風邪をひかない秘訣も、いつも新鮮な野菜を食べているから。野菜を売ることでは家計の足しにもなっています。

加えて、近所の人や教会仲間にも菜園づくりを教えたり、困っている人に野菜を無償提供したりと、地域の役に立つことができ、大きな喜びを感じています。一つ心配なのは、私がいなくなったあとに誰が菜園を続けてくれるかということ。これからは、自分の孫も含め地域の若者にもっと菜園の楽しさを伝えていきたいです」

◎注1…現地環境で手に入るものを持続的に活用する農業手法



DICで昼食を食べる男の子。これが一日で唯一の食事という子どももいるなかで、DICVたちは、なけなしのポケットマネーから食料を調達してできる範囲で提供している。



南アフリカプロジェクト・マネージャー 富田 杏子

SDGsは包括的な HIV対策を後押しするか

2015年9月の国連総会で「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択された。15年までの貧困半減などを掲げた「ミレニアム開発目標(MDGs)」の後継として、地球規模での課題の解決を目指す新たな道しるべとなる。アフリカではどの課題が重要視されているのか、そして施行に向けての課題とは。南アフリカのHIVの現状を通して考える。

生まれが違う MDGsとSDGs

MDGsは、西暦2000年、極度の貧困や飢えなどの解決に向け、8つの目標を掲げ188カ国が合意した。世界の国々が丸となり、期限付きの数値目標を掲げた貧困対策は画期的な一歩であり、実際に「貧困解決」を国際交渉の場で主流化し、途上国の開発計画と先進国の援助を協調する上で一定の役割を果たした。

8目標のシンプルなMDGsに比べ、SDGsは30年までに17目標169ターゲットの達成を目指し、その内容も、開発、環境、雇用、平和構築など多岐にわたる。この差異は、MDGsは政策専門家が草案を創ったのに対し、SDGsは100万人以上が関わり策定されたからだ。MDGsで取り残された経済格差や人権など、各分野に共通する課題、狭間の課題への取り組み強化を目指している。

アフリカ発の優先課題は

SDGsには「My World」という取り組みがある。16項目から一般市民が最重要と思う課題を選び投票、意見表明することで、SDGsの決定プロセスに参加できる。世界、アフリカ地域ともに、「より良い教育」、「保健医療へのアクセス」、「雇用の機会」がダントツでトップ3を占め、MDGsが人びとの最低限のニーズを満たせなかったことが、統計だけではなく人びとの実感からも伝わっている。

320万票集まったアフリカ地域では、世界の投票結果に比べ「よりよい交通手段と道路」「政治的自由」などが重要視された(注1)。

HIVと共に生きる 持続可能な社会へ

では、MDGsでの成果はどのようなもので、SDGsへの移行が何を意味するのか。HIV対策

◎注1…A million voices: the world we want. UN Development Group, 2013



HIV／エイズに関する研修。HIV感染の仕組みと体に与える影響や、ARVの服薬方法と副作用、母子感染予防など様々なトピックについて学ぶ。

を例に見てみよう。

MDGsの目標6は「HIV／エイズ、マラリア、その他疾病の蔓延の防止」。南アを例に見ると、

HIV対策は大きく前進した。母子感染予防の普及では、乳児死亡率は10000出産当たり54から23・6と改善された。ARVsに

アクセスするHIV陽性者の割合は05〜12年にかけて、13・9%から65・5%と改善し（注2）、今では300万人以上がARVs薬を無償で受け取る。HIVは死の病から共に生きる病に変わったのだ。

だが、全国に600万人以上いるHIV感染者のほとんどが貧困層で、副作用の強いARVs薬を毎日欠かさず服薬できるのは、栄養ある食事を取れるか、診療所への交通費の有無、正しい服薬方法を理解できるかなどに左右される。私たちの活動地域でも、HIV陽性者とは同じ器から食事を取りたくないなどの差別は日常茶飯で、陽性

者の多くが家族にすら現況を明かせない。地域の偏見の目への怖れが、特に若者や男性がHIV検査を受ける妨げとなっている。

活動地の政府役人が「治療薬が普及したから地域内でのケア活動はもう必要ない」と言ったことがある。数値上で成果を見やすい治療薬普及のみに焦点を当てては、偏見や差別、予防意識の変化、地域内のケア体制促進など、真にHIVを抱擁しその影響を吸収できる社会創りはできない。

目標数値ではなく、その背景にある社会課題に介入しないと包括的なHIV対策はできない。SDGsはその後押しとなるだろうか。

誰一人取り残さない

SDGsの目標3「すべての人の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」のターゲットとして「90年までにHIV／エイズの根絶」が挙げられている。この達成

のために国連エイズ合同計画がより検査から治療への効率的な対策を推し進める「90-90-90」（注3）目標を打ち出している。だが、これら数値目標のみに焦点を当てるとMDGs時代に起きた同じ取りこぼしを繰り返しかねない。

SDGsの合言葉は「Leave no one behind（誰一人取り残さない）」だ。あらゆる貧困、環境、社会課題で、特に困難にある人びとが社会から取りこぼされない対策とそのための変革を求めている。

SDGsは採択されたばかりだが、変革をもたらすかどうかは、影響を受けている人びと自身の政策決定や実施への参画が鍵となる。その中で、NGOをはじめ市民社会に求められる役割も大きくなっていくだろう。

◎注2…http://www.statssa.gov.za/MDG/MDG_Country%20Report_Final30Sep2015.pdf

◎注3…「2020年までに90%のHIV感染者が検査を受け、そのうち90%がARVs薬を持続的に服薬し、そのうち90%のウイルス数値を検知可能以下の数値にする」という目標。http://www.unaids.org/en/resources/documents/2015/UNAIDS_PCB37_15-18

読者のみなさんからの質問募集中!! 会員担当:宮西まで
お寄せください。



Q スーダンは なぜ南北に分かれたのですか？

A 1956年の独立以前から、首都がある国の中央(北部)と南部など地方との間には、言語や習慣の違いなどを背景とした差別や開発の大きな格差が存在し、それに対する反発と政権側からの弾圧によって独立後は半世紀にも及ぶ内戦状態が続きました。その後、国際社会の介入もあり住民投票によって南スーダンは独立しましたが、いまま課題は残ります。

南スーダンが分離独立する以前はアフリカで最大の領土をもつ国であったスーダンは、19世紀初頭以降、エジプトがすすめた植民地化の過程で領土を広げることによって形成されました。エジプト・英国の植民地支配の中で、北部に位置する首都ハルツームを中心にスーダンのアラブ系エリートが政治や経済を担う体制が構築されました。1956年の独立以降も、このアラブ系エリートが権力の中心である一方、歴史的に劣位に置かれ差別の対象とされてきた地域では、その状況が放置されてきました。

言語や習慣の違いが差別と開発の格差へ

これらの地域が現在の南スーダンであり、今もスーダンに属するダルフール地方、南コルドファン州や青ナイル州です。アラビア語ではなく固有の言語を話すこと、豚を食べたり酒を飲む習慣などが差別の対象となりました。これらの南部の人々は差別や開発の格差による不満から、北部と対立するようになります。一方、政府は南部独自の言葉、宗教や習慣を非イスラムであると主張して弾圧を正当化しました。こうして宗教は政治利用されて国民は分断され、1980年代に勃発した南北内戦は約20年間も続きました。

このように、人々の対立構造は、北と南という単純なものではありませんでしたが、国際社会は、宗教や人種の違いによる南北間の対立であるという考えに基づき、和平プロセスを主導しました。国際社会はスーダン政府を「北」、最大の反政府勢力を「南」の代表にして和平交渉を進め、2005年に包括的和平協定

(Comprehensive Peace Agreement, CPA) が締結されました。その後、6年間の猶予期間を経て、2011年1月、CPAに基づいて行われた南部の国民投票により、「南スーダン」は分離独立しました。

独立後も取り残された課題も

しかし、新しい国境のスーダン側に位置する南コルドファン州や青ナイル州などの地域は「北」に取り残される形となり、この地域が抱える差別や開発の格差などの問題は置き去りにされました。そして、政府がこの地域の反政府勢力を一方向的に武装解除させようとした結果、これに反発した反政府軍との間で紛争が勃発しました。2011年6月の紛争勃発から5年近く経過した今も、100万人以上もの人々が難民、避難民となるなどの深刻な影響を受けていると言われます。

JVCが活動する南コルドファン州カドグリ郡には、この戦闘を逃れてきた人々が避難民として暮らしています。JVCは、避難先に定住を希望する避難民の方々が、地域住民と資源をわかちあい信頼関係を築きながら安定した生活を送れるよう、井戸などの給水支援、菜園づくりによる生計向上、避難民住居建設などの支援をしてきました。今年は、避難民住居のトイレ建設、子どもの出生登録支援、幼稚園の園舎増設などの活動を行う予定です。また、JVCは国境を越えて南スーダンに逃れ、難民となった人々が暮らすイダ難民キャンプでの幼稚園支援も行っています。分断された人々の双方に関わり、スーダン側、南スーダン側の両方で支援を続けています。(スーダン事業担当 小林 麗子)



JVCが導入した「家族カルテ」。家族・地域ごとに病気を治療・予防していくために導入。アフガニスタンでは一般的にカルテ自体が使用されてこなかった。

ら去るのだ」といった誤認識で住民の信頼が失われないよう、移管の理由を真摯に説明する必要がある。

地域全体の自立支援に向けて (保健分野・地域開発全般)

JVCは診療所運営と合わせ、健康教室などを通じ、住民指導者、女性、学校の教員や生徒、患者などを対象に住

民自身への保健意識の喚起を行ってきた。さらに保健意識と実践を根付かせていくための

の次段階として、保健に取り組む住民の組織化・自主活動を支援してきた(前出の「保健委員会」・女性グループ・教員グループ)。現在、これらグループがJVCを離れ最終的な自立に向かうため、グループ自身による自発的な活動提案、提案を実施する実働メンバー、活動を支える財源調達などの必要性について、現地スタッフや住民グループ自身とも議論を行っている。

また、保健分野に関わる諸主体(保健委員会、女性グループ、教員グループ、診療所、村に配置された地域保健員)の間の調整も必要だ。その役割を行政からも期待されているのは保健委員会で、その役割が担える支援も必要だ。村や地区ごとに存在する個々の

保健委員会を調整もしくはは束ねる主体も必要と考えている。

また地域には、インフラ整備、保健、教育、農業、青年、労働者など分野ごとのグループが存在するが、地域全体のニーズを調査し、優先順位をつけ、立案、資金調達(分配)、活動実施、モニターなどを包括的に行う、地域開発全般に責任をもつグループの必要性も認識されつつある。

平和・非暴力への取り組み

年末の現地スタッフとの議

論で、現在の戦闘拡大や治安悪化、自称「IS」の影響などの状況に鑑み、「地域で平和や非暴力の取り組みを行うべきだ」との提案が出た。身近な暴力と対峙するため、家庭内



アフガニスタンでのワークショップ。地域指導者からなる「保健委員会」が、自分の住む地域の取り組みの成果や課題を発表。高い成果が上がっていると、とても誇らしそう。

での非暴力、暴力からの子どもへの保護、平和に向けた地域の役割や若者の取り組みなどについての意識啓発を、「家庭や地域で行うことで、平和実現が可能になる」との議論がなされたのだ。

地域保健を通じてともに活動してきた地域グループを、この取り組みでもパートナーとすることが提案されている。活動内容として、平和・非暴力に関する配布物の作成・配

布、地域の安全・平和の模範事例としてJVCの活動地域を紹介するビデオ作成、JVCの活動地域ならびに治安の悪い地域それぞれの地域指導者などを招いた経験交流などが挙げられている。

地域の「寺子屋」教育分野の課題

ほかに、教育分野で、依然として低い識字率や女性の就学率などから、正規の学校を補完する「寺子屋」のような形の教育支援ができないかとの議論も、現地スタッフから話されている。

以上を踏まえ、本年の5、6月頃には今後数年間の活動計画を作成する予定。今後も、本誌などを通じ、作成された計画についてお知らせしていきたい。

「人道支援グループ」は「平和構築」を行っているのか?

JVCが事業展開するアフガニスタン、イラク、コリア、パレスチナ、スーダンの各事業は、「人道支援グループ」として「人道支援」に加え「平和構築」活動も対外的にも打ち出している。だが、平和構築はできていないのではとの問題意識から、昨年9月、グループでワークショップを行った。



スーダン事業現地代表
今井 高樹

る内部のワークショップだ。

アドバイス役として参加していただいた外部の研究員から「JVCが行っている人道支援には、社会を安定させ将来の紛争を予防する意味で、十分に平和構築としての意味がある」との指摘を受けるとには、スタッフ一同、大いに勇気づけられた。



アフガニスタンのJVCスタッフとイラクでのパートナー団体代表も交え、パレスチナ、アフガニスタン、スーダン、南スーダン、コリア、イラクの事業担当者が参加しての「平和構築活動の現状を学ぶ」ワークショップの様子。

平和構築ワークショップで 見えたもの

JVCは、特に、「国際社会」が行ったイラクやアフガニスタンに対する「武力による平和」の強制に対し、現地の人々とともに武力によらない平和を実現する道筋を模索

してきた。だが、対外的に「平和構築」の文字を使ううちに、人道支援はしているが平和構築はできていないのではないかと、一種の「うしろめたさ」もまた感じるようになった。そうした問題意識から開催したのが、昨年9月の「JVCの平和構築」について考え

味で、目に見える成果が現れている活動もあった。本特集で紹介されている、イラクのパートナー団体が実施する住民融和の取り組みである。アフガニスタンからは、JVCとの出会いをきっかけに人々が地域の平和を意識した取り組みを始めている事例も報告

された。

「人道・平和グループ」 としてのスタート

しかしイラクやアフガニスタンでの取り組みは、グループの中ではまだ部分的、単発的なものである。ここから学んだことを全体の活動の方向性にごう組み込み、広げていくかが課題である。今年、人道支援グループは

「人道支援／平和構築グループ」(人道・平和グループ)に名称変更する。名称に「平和構築」を加える理由のひとつは、JVCの人道支援の第一の目的が人びとの生命を守ることであっても、活動を通じて平和な社会づくりや将来の紛争予防に寄与しているかどうか、あるいは、支援が人びとの不均等を広げるなど紛争を助長させていないか、常に点検する必要があると考えるからである。

もうひとつの理由は、人々の和解や相互融和のような、紛争の解決や予防そのものを目的とする活動を今後増やしていく意思表示である。無理な背伸びはできないが、まずは地域に軸足を置き、そんな活動の事例を積み上げていきたい。



[イベント報告] 第15回 南北 코리아 と日本のともだち展

子どもたちの絵から 大人が感じること

事業担当
寺西 澄子



暗いニュースには 明るい絵画で

この絵画展は、JVCを含め9団体で構成する実行委員会が主催するもので、日本のNGOと在日コリアン団体の共同体制で続いています。年末年始にかけて、日韓協議、

北朝鮮の「水爆実験」宣言やロケット発射、日朝協議の白紙化などといったニュースが多く、そこから感じられる緊張関係は、私たちの感情にもざらざらとした感触を残すばかりでした。しかし、この『ともだち展』は1年をかけて東アジアの各

地域を巡り、多くの子どもたちの日常や笑顔に出会ってきました。それを一目で伝えられる展示会にしようと、会場エントランスには日・朝・中・韓で集めた実物大の子どもたちの姿を描いた明るくにぎやかな作品を並べました。個人作品「私のお気に入り」の展示室では、朝鮮や中国の子どもたちが絵の作者に向けて送ったメッセージを紹介、多くの注目を集めました。

多様なイベントで 考えるきっかけ

開催期間中には、さまざまな催しを行いました。韓国や中国からのゲストも交えて、各地で開催した絵画ワークショップについて聞く『どこから来たの？東北アジアのなかまたち』は、20代の若手ボランティアたちが「絵でつながる」ともだち展のおもしろ

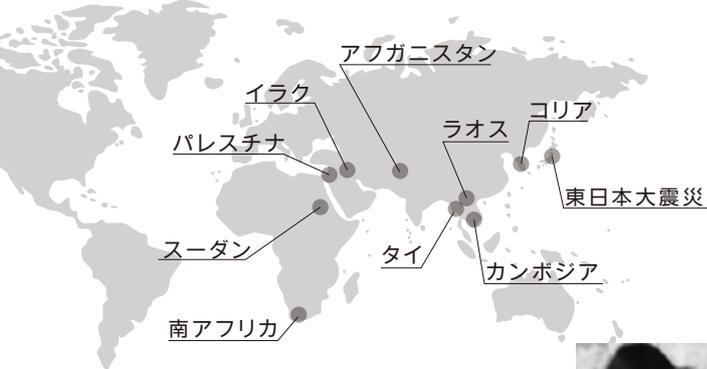
さをお伝えしました。

トークイベント『北朝鮮』をつたえるということ』では、昨夏の平壤出張に同行取材した報道関係者をお招きしました。日本人の大学生が、平壤外国語大学で日本語を学ぶ学生たちと交流した様子を15分近い番組にまとめたクルーズです。「朝鮮の学生はこう言われてるんでしょ」「自由に取材できないんでしょ」と詮索され、批判されることは重々承知で、撮影し構成した苦勞の裏側を話してくれました。一般的な現地レポートにはやはり制限がある一方で、学生交流は3日間のみで予定調和も制約もなし。「何の先入観もなく見てほしい」との思いは、『ともだち展』にも通じるものがありました。

『私の出会った平壤の大学生』では、上記テレビ番組に

もなった大学生交流の様子を、参加学生4名が報告しました。日本に戻って何を考えたかと質問された学生は、「自分の常識を見つめなおす作業をしている」と話し、価値観の異なる人との関係構築についてあらためて深く考えなおす機会を得たことを語っていました。

今回の『ともだち展』はただの展示会ではなく、来場者が語り集う場にもなりました。とりわけ気になったキーワードは、トーク参加者や来場者からたびたび飛び出した「自分のこととして考える」「継続的に関わり続ける」。現状や将来を憂うだけでなく、現在を出発点として動きっかけを見つけられるイベントとなったなら幸いです。



JVCは現在、10の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

12月後半～3月前半

イラク

心のケア・プログラムを実施

JVCの現地パートナー団体INSAN（インサーン）が実施している、国内避難民の子どもたちと受け入れコミュニティの子どもたちを対象にした平和や共生をテーマにしたワークショップのモニタリングのため、2月3日～13日の期間でイラク北部に出張した。

現在、イラクでは、2014年6月以来、過激派組織「イスラム国」との戦闘などにより周辺情勢が急激に悪化、多数の避難民が発生しており、クルクーク市でも約50万人以上を受け入れる事態となっている。

ワークショップでは、特に戦闘によって両親や家族を奪われ、心に傷を負った子どもたちを対象に、専門家に



今回のワークショップに参加した子どもたち。後方の壁には、日本から届けられたメッセージが貼られている

よる心のケアを実施した。また、このワークショップの開催資金の一部は、クラウドファンディングを通じて、昨年8月から約2ヵ月間で約68万円が集まった。クラウドファンディングの

期間中に開催したイベントでチュールリップの形の折り紙に書いてもらった数多くのメッセージを、イラクの子どもたちに届けることができた。

（池田）

気仙沼

ししおり
鹿折地区での
復興支援



「出張！鹿折情報サロン」にて情報提供を行う様子

2月14日、浦島地区の歴史や文化に関する講演会を開催。参加者から「自分が暮らす地域を見直すことができた」などの感想が寄せられた。防災集団移転のアドバイザー派遣事業では、「まちづくりルール」の確認や集会所に関する協議などを行った。2月下旬には、浦島地区の魅力や震災の教訓を伝える養殖体験ツアーを開催し、19名の参加を得た。

1月より、市内各地で鹿折地区災害公営住宅の入居予定者を対象とした「出張！鹿折情報サロン」を開催し、延べ58名の参加を得た。ここでは災害公営住宅に関する情報提供や意見交換を行った。同災害公営住宅のコミュニティ形成を目的とした「鹿折あつまっぺ！『趣味のじかん』」を3回開催し、加えて鹿折地区内の仮設住宅にて住民の心身の健康維持を目的とした「いきいき交流会」を10回開催した。（石原）

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』／大学生交流



小中学生向けの絵画ワークショップでは新たに3作品が完成した

◎東京展：日・韓・朝・中の子どもたちが描いた作品を展示する東京展を、2月中旬にアーツ千代田3331（千代田区）にて開催し、4日間で200名の来場があった。本年の共同制作である子どもたちの等身大自画像30点のほか、「私のお気に入り」のテーマで集めた個人作品115点を展示。昨年度の展示作品に寄せられた各地の子どもたちのメッセージも併せて紹介した。期間中には、子ども対象の絵画ワークショップや、平壤を同行取材した報道関係者によるトーク「『北朝鮮をつたえるということ』」、各地での共同制作ワークショップの様子をお伝える『どこから来たの？東北アジアのなかまたち』、日朝大学生交流に参加した日本人大学生による『私の出会った平壤の大学生』といった一般向けギャラリートークを実施した（本誌21ページ参照）。（寺西）

パレスチナ

学校・地域保健事業(東エルサレム)／栄養失調予防事業／アドボカシー



東エルサレム事業での学校保健委員会の活動の様子

◎栄養失調予防事業：昨年8月から開始したガザ事業の3期目は、3月中旬までに664人の新規対象の子どもと、770人の前期から繰越で対象となっている子どもの栄養状態の検査を終えた。また、意識改善講習会を58回実施し、366人の母親と、540人の幼稚園児が参加した。活動の持続性の要であるボランティア育成は、精力的に活動している人とやる気が途切れている人とに分かれている。今後どのようにボランティアのモチベーションを維持できるかが課題。

◎学校・地域保健事業：昨年12月末から始まった新東エルサレム事業は、現在までに17校の学校で保健委員会を設置し、220人の生徒が委員会の立ち上げに関わった。教師および保健省職員へのトレーニングはヨルダン川西岸で発生している先生たちのストライキの影響を受け、4月開始に延期したが、活動実施期間も延期して対応する予定。

◎アドボカシー：アドボカシー事業の更なる拡大を目的に事業立案を行った。また、イスラエルのNGOを含め10以上の団体に聞き取り調査を行い、次年度の協働事業実施(特にヨルダン川西岸のC地区対象)準備を進めた。日本では担当が8回の講演を実施し、武器輸出反対ネットワーク設立への賛同文を発表した。雑誌へは6回寄稿し、メディアにコメントが2回取り上げられた。(金子)

タイ

日・タイ経験交流／医療支援(タイ南部)



原発事故後の南相馬市の状況を語る今野氏(写真右、JVC南相馬のパートナー団体理事長)

◎日・タイ経験交流：2月20～22日、福島原発事故からの復興と再生に取組む実践者3名をタイに招聘し、タイ国内で原発建設候補地となっている2カ所とバンコクでセミナーを開催。東日本大震災から5年が経過しようとしている現在の福島の現状や市民に抛る放射能測定の必要性、原発の問題は発電技術の選択ではなく国の発展の方向性をきちんと議論していく必要があることなどを訴えた。タイからは今後15年のタイのエネルギー需要予測を示し、本当に原発を作ることが必要なのかという問題提起がなされた。(下田)

◎タイ南部での医療支援活動：従来通り緊急医療支援を行うと同時に、支援のあり方とJVCの体制の2つの観点から事業の今後を検討し、2015年度いっぱいでの支援終了を決定した。(平野)

南アフリカ

HIV陽性者支援(リンポポ州)



子どもを支える連携の輪の大切さを感じる

11月末にボドウェDICで実施したHIV予防啓発ピア・エデュケーター講座では、14～18歳参加者24名のうち3名だけがテストに合格し、ピア・エデュケーターの証明となるバッジを受け取った。クリスマス休暇が明け、合格した子たちを中心に復習会を実施。その後のテストでさらに11名が合格。また、2016年は地域での子どもたちによる奉仕活動をDICの活動の一環として行うことになり、3月3日には近隣の中高一貫校の清掃活動に20名以上が参加した。

2月24～26日にはボドウェDICの保護者を対象にワークショップを開催。ジャーニー・オブ・ライフという手法を使い、幼少期の楽しかった・辛かった経験を振り返ることで、現在子どもたちが抱えている悩みやその解決のために保護者、地域社会ができることを一緒に考えた。(富田)

ラオス

農業・農村開発／土地森林保全事業(サワナケート県)



土地・森林に関する法律が記載されたカレンダーを使用した法律研修

12月は稲の収穫を受けて、米銀行への米の返済が始まり、これに合わせて運営規則の改定も進めた。3月中旬には、第1フェーズに設置のものも含め全米銀行の委員で集まり、これまでに直面した問題とその克服方法を共有する経験交流を行った。乾季のもう一方の柱である井戸の活動では、掘削する村の選定を終え、実際に掘る場所を決める話し合いを進めている。ピン郡の2村では、既存の浅井戸に屋根とセメントリングを取り付け、水質と水もちを改善した。

森林保全の活動では、参加型土地利用計画で国立保護林内での村人の林産物採取について行政内で様々な意見が出る、共有林の設置で設置予定地を隣の郡に属する隣村が自分たちの村の境界内だと主張する、など、複雑な問題が発生しスムーズには進まなかったが、関係各機関と緊密に連携して対処している。法律カレンダーを使用した法律研修では、今後の事業終了も見据え行政官に研修を行い、行政官とともに村での研修を行った。2月中旬には半期会議を行い、過去半年間の活動の進捗を振り返り、また今後半年の活動予定について話し合った。また、長年関係の深いアジア学院やJICA主催の学生現地訪問プロジェクトの訪問受入も行った。(平野)

アフガニスタン

地域保健医療事業／
教育支援(ナンガルハ
ル県)／アドボカシー



正しい歯の磨き方を実践してみた

◎地域保健医療事業：これまで診療所での待ち時間を利用した健康教育や、安全なお産や家庭での病気予防など女性向けの保健教室を実施してきた。この期間に初めて、男性村人を対象とした健康教育を開催した。各拠点で地域保健員が村の男性たちを集め、JVCの地域保健担当スタッフがトレーナーとなり基礎的な保健の知識を伝えた。さらに、診療所に頼らなくても村において病気予防の自主的な取り組みが実現していくためには村人の協力が必要であることを改めて伝えた。予定を上回る参加者が集まり、一定の関心が見られた。

◎教育支援：教員と生徒代表によって構成され、学校における健康教育の主体となる「学校保健協議会」が、地域の中で特に意欲の高い4校で発足し、活動が開始した。この地域には歯科サービスが存在しないことから虫歯など歯のトラブルが多いため、学校保健協議会の最初の取り組みとして、歯みがき推進キャンペーンを実施した。担当スタッフが歯磨きの重要性、正しい磨き方を説明し、生徒たちと実際に歯みがきを練習した。こうしたキャンペーンを企画・実施していけるよう今後もサポートする。(加藤)

カンボジア

農村における生業改善
支援／環境教育／
資料・情報センター



校外で清掃活動をする小学校の生徒たち

◎農村における生業改善支援：フォレストガーデン(小規模複合菜園)の普及の一環として行っている溜め池および井戸支援の候補者への聞き取り調査と候補者選定を行った。また、2月下旬にはバタンバン大学から講師と学生を招き、事業地6村出身の農民18名に対して衛生面に主眼をおいた食品加工研修を実施した。参加者は、加工の際に一手間加えたり、道具の取り扱いや作業・保存環境を少し工夫するだけで、菌の繁殖を防いで加工品をより長持ちさせることができるのだと納得した様子だった。

◎環境教育：活動地の小学校4校の教員・生徒とその周辺住民(計922人)を対象に、参加型の地域美化イベントを開催し、地域の環境改善やゴミの分別の必要性を訴えた。また小学校2校において、飲み水や学校菜園の水やりに使用される溜め池の修理および新設を支援した。

◎資料・情報センター(TRC)：事務所の移転に伴い、プノンペン市内の新施設への引っ越し作業を行った。また、図書館の利用者数増加を目指し、近くの大学校内や公共施設などに貼り出す宣伝ポスターを作成した。(稲垣)

南相馬

仮設住宅でのサロン運営

南相馬市原町区大町災害公営団地におけるサロン開設にあたって、これまで団地自治会長らと住民主体でのサロン運営体制を模索してきた。前年には先進事例を団地住民と視察に行くなどし、約5ヵ月の準備期間を経て、「大町きらきらサロン」が1月にオープン。初日には80人近い利用があった。

仮設住宅では仮設住宅4ヵ所におけるサロン活動を継続中。復興公営住宅や自立再建による移転が増えてきている。仮設の入居率は現在70~80%程度で、今後さらなる減少が予想される。今年4月に市南部小高区の避難指示が解除される方針が示されていたが、延期になるとの見方が強く、仮設住民間に動揺が広がらないよう、サロンでの精神的なケアも視野に入れる。(白川)

スーダン

紛争による避難民・
難民への支援

紛争が続く南コルドファン州の州都カドグリ周辺および国境を超えた南スーダン側の難民キャンプで、戦闘を逃れた避難民・難民への支援を実施中。

カドグリ市郊外の避難民居住区にはトイレを設置していない家屋が多いことから、衛生状態の悪化が懸念されていた。JVCは、住民自身による200基の戸外設置型トイレ建設に対してセメントやレンガなどの資材と技術研修を提供。その一環として、3月上旬に保健衛生に関する啓発イベントを実施し、技術研修の対象者を選定した。

難民キャンプでは、難民自身が運営する幼稚園を支援中。12月後半に園児への学用品を支援し、1月には保護者向けの研修を行い、教育を受ける子どもの権利などについて伝えた。(今井)

調査研究・政策提言

外務省・JICAとの政策協議／
各種提言

◎NGO・外務省定期協議会2015年度第3回政策協議会(3月3日)：標記会議に谷山、渡辺が参加。

◎NGO-JICA協議会2015年度第4回(3月16日)：標記会議に長谷部が参加。

◎プロサバナ事業関連：【1】第15回、16回プロサバナ事業に関するNGO・外務省意見交換会(2月19日、3月9日)：標記会議に渡辺、高橋が参加。【2】昨秋以降の現地におけるJICAの契約コンサルタントによる活動に対して、公開質問状および声明を提出(本誌20ページ参照)。【3】2月4~5日、オランダの社会科学大学院大学(ISS)にて開催された学会において、モザンビークの土地収奪などに関する調査について、渡辺が農民とともに報告した。

(谷山)

2016 JVC STAFF

世界の10の国・地域で活動する
JVCのスタッフに
今年度の抱負を語ってもらいました。

東京事務所



下田



小林



磯田

上段8人左から：白川、細野、山崎、橋本、池田、野辺地、横山、木村
中段6名左から：宮西、小野山、寺西、渡辺、石川、中原 下段6名左から：並木、大村、長谷部、谷山、加藤、稲見

谷山博史 (代表理事)
非戦のモットーを家庭と町内会で実践したい。核心は対話と抵抗のための自給。

磯田厚子 (副代表/非常勤)
「全力でやり遂げる」ことに力を注ぐあまり、「やっすりばなし」になりがちの私。まとめよう!

長谷部貴俊 (事務局長)
かつて担当だったアフガンの和解に向けて取り組む。子ども2人の話をもっとキチンと聞く。

細野純也 (事務局長次長)
サッカーディープツアー。J1から都リーグ3部まで9カテゴリを1試合ずつ生観戦。

山崎 勝 (カンボジア事業担当)
現地の農家やスタッフのためにできることを大切にしながら、東京事務所での限られた時間を有効に活用する。

木村 茂 (ラオス事業担当)
日帰りで行ける、自然に親しみながらリフレッシュできる場所をたくさん見つける。

下田寛典 (タイ事業担当)
マラソンかなあ、富士山かなあ。人生で一度はやっておきたいことを何かひとつ。

渡辺直子 (南アフリカ事業)
家の廊下で埃をかぶっているジャンベを...どうにかしたい(叩けるようになる)。

小野山亮 (アフガニスタン事業現地統括)
スゴワザ!アフガンスタッフの「ツボ」を押さえる。

加藤真希 (アフガニスタン事業担当)
主食からお菓子まで、自分の食べるものをもっと知る。生産地、生産法、味、栄養...

小林麗子 (スーダン事業担当)
昨年に引き続き丁寧に暮らす。そして年内に定期的な運動を習慣にしたいです。

池田未樹
(イラク事業担当/アフガニスタン事業担当)
JVC軽音部知っていますか?出張演奏受付中!(売上はJVCの活動に寄付されます)

中野恵美 (イラク事業補佐/非常勤)
小学校のPTA副会長、市PTA連合会の幹事、そしてイラク支援、がんばります。

寺西澄子 (コリア事業担当)
中・露・朝が交差する東北アジアのるつぼ・中国東北部に興味津々。今更中国語に挑戦?

並木麻衣 (パレスチナ事業担当)
※5月よりパレスチナ現地調整員
錆びついたアラビア語を再勉強して、パレスチナ人に現地語でインタビューします!

白川 徹 (震災支援担当/南相馬)
元JVCスタッフの妻が妊娠中です。彼女を精一杯支えて、元気な子どもを授かりたいです。

横山和夫 (震災支援担当/気仙沼)
億劫がらずに、外へ出よう。

大村真理子 (広報担当)
日付が変わる前に寝て、6:30に気持ちよく起床する。

宮西有紀 (会員・支援者担当)
どんなに疲れていてもタップダンスのレッスンをサボらず、リフレッシュする!

中原和江 (経理担当)
大好きな渡辺貞夫の「モーニング・アイランド」をフルートで吹けるようになる。

稲見由美子 (経理/労務)
脱・出不精。週末は、御朱印帳を持って東京都内近郊の寺社巡り。

野辺地和郎 (ファンドレイジング担当)
ハイドン弦楽四重奏の第二ヴァイオリンを弾き、友人に聴いてもらう!

石川朋子 (コンサート事務局)
年賀状(私用)に書く「こんな1年でした」が、さっと書けるような出来事をつくる!

橋本貴彦 (カレンダー事務局)
昨年度の抱負まであと一息!忘年会や新年会でバグパイプの音色で皆さんに踊っていただく!

2016 JVC STAFF

カンボジア事務所

稲垣美帆(プロジェクト調整員)
スタッフや現地住民との親交を深め、互いの信頼関係構築に従事する。

ミエン・ソマツチ
(農業プロジェクトフィールドスタッフ)
チークラエン郡の全家族が1年中食糧に困らず、健康で衛生的に暮らせるようにしたい。

ロス・ポンロック
(農業プロジェクトフィールドスタッフ)
農業チームと環境教育チームで積極的に協力して事業を進めていけるように努めたい。

コーン・シキム
(農業プロジェクトフィールドスタッフ)
スタッフと協力して農家を支援し続ける。新しいことに挑戦し、自分の能力を磨きたい。

チャン・ポク
(農業プロジェクトフィールドスタッフ)
これからも農家を支援し続けていきたい。JVCの事業が円滑に進むように努力したい。

上段左から:テロアット、ソマツチ、ソポアン
中段左から:エン、チャンレアスミー、(省く)、稲垣、ブンルウーン、シキム、チェンガウ
下段左から:ヴォン、ピー、ポンロック、ポク、リッツ



セン・テロアット
(環境教育プロジェクトリーダー)
昨年度にJVCが伝えた知識を、学校の先生が児童に教えられるようにサポートしたい。

パート・ピー
(環境教育プロジェクトフィールドスタッフ)
環境や自然資源に関する対象者の知識を高める。有機農業を取り入れた生活も推奨する。

ケン・ソポアン
(シムリアップ事務所総務担当)
カンボジアがますます発展するよう、昨年度よりも仕事をきっちりとこなしていきたい。

フム・ヴォン
(シムリアップ事務所清掃・調理担当)
JVCの事業が順調に進み、ますます活発になりますように。

ヘン・チェンガウ
(プノンペン事務所総務担当)
総務の仕事を確実にこなしJVC内外の問題解決に努める。日本人とも積極的に議論したい。

チャン・チャンレアスミー
(プノンペン事務所会計担当)
会計の仕事を期限通りに終わらせる。JVCスタッフと良い関係を保つ。英語を上達させる。

イン・コック・エン(TRC司書)
TRCの使用者が増えるよう、昨年度よりもTRCを良いものになりたい。

パオ・リッツ(運転手/総務補佐)
JVCの事業のために従事できて本当に嬉しい。自分の私生活も充実したものにしたい。

プム・ブンルウーン
(運転手/総務補佐)
自身の健康管理と自動車の整備をきちんと行い、道中のスタッフの安全を守りたい。

南アフリカ事務所



左から:フィリップ、モーゼス、ドウドウ、富田

富田啓子(プロジェクトマネージャー)
他のスタッフ全員の抱負が驚きの家族計画(!)なので、私も第二子を考えようかな!

ドウドウ・レンガビンデ
(プロジェクトコーディネーター)
45歳になる今年中に子どもを授かること。ただし、まずは父親探しから。

フィリップ・マルレケ
(プロジェクトフィールドアシスタント)
再婚。子どもたちのために新しいお母さんを迎え入れたい。

モーゼス・シャバニ(会計担当)
結婚。年内には家庭を持ちたい。そのための準備を進めていきます。

スーダン事務所



左から:モナ、今井



サラ、イスマイル、サブリ、サイーダ

今井高樹(現地代表)
南の島でのんびりしたい(けど、今年も無理そう)。

モナ・ハッサン(現地代表補佐)
クルマを買って自分で選んだルートを運転して、ナイル川の橋の渋滞から逃れる。

イスマイル・ジュマ
(カドフリフィールドオフィサー)
研修を受けてプロジェクトマネジメントを勉強する。

サブリ・アルブフラ
(フィールドオフィサー)
そろそろ将来の生活設計を立てないこと…。

サラ・モジヨ(フィールドオフィサー)
去年スマートフォンを買ったので、今年はWhatsAppの友だちを増やす。

サイーダ・アルファキ
(フィールドアシスタント)
ハルツームの都会暮らしに負けないように、おしゃれに磨きをかける。

ラオス事務所



平野将人(現地代表)
ラオス語で(それなりに)スラスラとタイプできるようになる。

林真理子(アドバイザー)
今年から始めた硬式草野球。思った場所に球を投げられるコントロール力を身につける。



3列目左から:フンパン、シーサワン、平野、ホーム、別枠:林
2列目左から:チャイアン、(省く)ソムソン(、省く)
前列左から:オヴァンティーン、アロニー、ホンケオ、渡久山

渡久山舞(現地調整員)
年齢と共に下降中の体力を、運動をしてV字上げる。

フンパン
(プロジェクトコーディネーター)
ベトナムの大学に通う娘の卒業式にお祝いに行きたい。

シーサワン(農業/家畜・井戸担当)
井戸と家畜の活動が上手いよう頑張りたい。修士のコースを無事卒業したい。

オヴァンティーン(農業/ラタン担当)
親の家の建て替えのための木材を用意したい。

ホンケオ(森林チームリーダー)
大学の学士のコースに進みたい。

チャイアン
(森林チーム/土地利用担当)
家を完成させたい。

ソムソン(森林チーム)
開発ワーカーのようにになりたい。

アロニー(会計・総務担当)
息子に学校を変えるよう交渉したい。

ホーム(運転手)
首相になって国を統治したい。

2016 JVC STAFF

アフガニスタン事務所



後列左から：シャー・モハンマド、グラライ、フルシード、ジャハン・ミール、
ジャナット・グル、サルダル・ワリ、ワハーブ、ミル・ジャマール、ワグマ、マmana、
ファティマ 前列左から：(ナビ・ジャン) ロトフル、ラヒーム



左から：ラジーク、ザビウラ、サファラガ、イサヌラ、イザトゥラ、
トラブ・ハーン、アガ・グル・パチャ、シャプール、ザビルラ、
ナビ・ジャン、デラワール



左から：アシール・モハンマド、
シャハブディン



左から：ファティマ、バスマナ、ワシマ



アジマール

シャプール(医師、医療事業責任者)
殺傷事件のない平和な年になってほしいです。

ワハーブ(医師、地域保健責任者)
将来の活動、これから来るチャレンジにむけて、みんなでがんばりましょう。

ファティマ(地域保健担当)
今年が平和な年でありますように。

ワグマ(簡易診療所助産師)
国民に健康と平和が訪れますように。

マmana(診療所助産師)
健康で幸せな年となることを祈ります。

ジャハン・ミール(医師、診療所長)
住民によりよい保健サービスができるようがんばります。

グラライ(診療所検査技師)
愛するアフガニスタンに平和が訪れますように。

ラヒーム(診療所看護師)
JVCが他の地域でも活動することを期待します。

サルダル・ワリ(医師、簡易診療所長)
現地医療スタッフを研修のために日本に派遣してください。

ミル・ジャマール
(簡易診療所薬局担当)
雇用契約を延長してください。一度日本を訪問したいです。

ライズ・アフマッド
(診療所薬局担当)
今年が平和な年になってくれることです。

フルシード(ワクチン接種担当)
国の平和と安全を願います。

ファザール・ハク(ワクチン接種担当)
ワクチン接種活動を続けていきたいです。

ハビブラフマン(診療所守衛)
今年もたくさんのお花を植えていきます!

ジャナット・グル(診療所守衛)
診療所での仕事が上達しますように。

ザビルラ(治安/総務)
アフガニスタンで平和合意が実現するように願っています。そのためには平和構築活動を続けていきます。

サファラガ(調理/総務担当)
災害や事件の少ない、愛に満ちた年であることを願います。

アジマール(教育支援担当)
2015年にさようなら、2016年こんにちは!
今年の目標は、英語とパシュトゥー語の翻訳作業です。

ファザール・ハリーム(地域保健担当)
今年度は医学部に入学したい。

イサヌラ(経理担当)
アフガニクリケットチームがワールドカップT20でいい成績をとること。がんばれ!!

トラブ・ハーン(経理補佐)
タリバンとアフガン政府の話し合いがうまくいくことです。

シャー・モハンマド(運転手)
メッカに巡礼に行きたい。

ナビ・ジャン(守衛/運転手)
メッカに巡礼に行きます。

デラワール(守衛主任)
事務所の仕事に邁進します。

イザトゥッラー(守衛)
家の子どもの教育に専念したい。

アガ・グル・パチャ(守衛/運転手)
国の平和に貢献したいです。

ザマヌラ(守衛/運転手)
夜間学校に通って学業を終えたいです。

ラジーク(守衛)
英語を勉強すること、家族のために小さな車を買うこと。

バスマナ(調理担当)
子どもの成績が上がること、家族のために夫がよく働いてくれること。

シャハブディン(簡易診療所守衛)
今年も地域の人たち変わらない保健サービスを続けていきたい。

アシール・モハンマド
(簡易診療所守衛)
これからもJVCがよい診療所運営をしていけるようにしたい。

カン・ミル(診療所庭師)
植えた草花が元気に育ちますように。

ワシマ(地域保健担当補佐)
これからのアフガニスタンに平和が訪れてほしい。

ロトフル(診療所検査技師)
日本を訪問して検査技師としての技術をさらに磨きたいです。

ザビウラ(教育担当)
災害がなく、悲しみが少なく、笑顔と友情にあふれた一年になることを祈ります。

エルサレム事務所



左：今野、右：金子

金子由佳(現地代表)
①有意義で効率的なプロジェクトの運営、
②読書時間の確保、③健康管理

今野泰三(育休中)

気仙沼事務所



左から：伊藤、岩田、石原

岩田健一郎(現地代表)
離れ離れの新婚生活。
妻と過ごす一日一日を笑顔で過ごしたい!

石原靖士(震災支援担当)
時間を大切に!

伊藤祐喜(震災支援担当)
何事も楽しむ。

隠され選別され強制される

「参加」プロセスとは

南アフリカ事業担当 渡辺 直子

プロサバンナ事業の行方はいまだ予断を許さない。今号でご報告する事態を受け、日本のNGOは、事業の現状と問題点を取りまとめた抗議および事業の抜本的見直しを求める要請書、ならびに公開質問状を外務省・JICAに提出した(注1)。ぜひ記事と合わせてお読みいただき、日本の援助の実態をウォッチし続けていただきたい。

説明とやっていることの齟齬

開いた口がふさがらないとはこのことだ。ここまでしてやりたいこととは何なのか。

昨年4月に開催された事業のマスタープラン・ドラフトに関する公聴会が、当事者であるモザンビークの農民たちにとってまったく意味あるものとならず、公聴会の「無効化」を求める声明が、世界の80を超える団体が賛同する形で、現地の農民組織、NGO、教会、研究機関などから出された(注2)。これに対し、昨年9月、モザンビーク政府が来日し、外務省・JICAとともに「公聴会は無効にしないもの」、再度開催し、「UNAC(モザンビーク全国農民連合)をはじめとする農民組織とNGOに、事前に開催方法について意見を聞く」と約束した。

だが、蓋を開けてみれば、約束と真逆の事態が進行している。

10月下旬になっても現地でも何ら動きがないことを受け、10月27日の外務省・JICA・NGO間の第13回意見交換会で状況確認したところ、JICAは「モザンビーク政府が一生懸命議論中」と回答、12月8日の第14回意見交換会でも「あまり状況はかわっていない」とされた。一方、11月下旬に入り、現地NGOやUNACからは「JICAに雇われたコンサルタント」が自分たちの団体を「個別訪問」し、そのスタッフ個々人と「個別に協議している」という「不穏な動き」に不安を抱えているとの連絡があった。このため、これについても12月の意見交換会で確認したところ「今はまだ話せる状況ではない」として、「日本の支援の枠内か」との質問については「いいえ」と否定された。

これでは埒が明かない。そこで、国民の開示請求権と国会議員の国政調査権行使して公文書入手した結果、驚くべき事実が判明した。

実際はこうだった。10月7日にJICAより特定の3社にメールで「市民社会関与プロジェクト」の応募要請が送られ、11月2日には現地コンサルタント企業・MAJOL社と契約が結ばれていた。応募要請書および契約書には、コンサルタントの業務内容として、プロサバンナの関係者/団体の参加状況改善のため、「対話プラットフォーム」を作り、「1月中旬に最初の会合を行う」とあった。そのために、プロサバンナの関係者/団体との「個別協議」を行い、「対話」への参加に「意欲を示している」団体を特定し、これらの団体と1月の会合の準備を進めることが書かれていた。これが前述の現地からの情報にあった「JICAに雇われたコンサルタント」による活動だ。つまり、10月初旬には、「対話

の手法やプロセスの期限が全て決められていたということになる。これでは、隠ぺい、虚偽のそりりは免れないのではないか。

「参加」の違いが意味すること

これらのプロセスの結果、抗議の声を上げる組織は排除された。そして排除しておきながら「農民組織の参加」というお墨付きがほしいプロサバンナ事業実施者は、UNACの「参加」を取り付けるため、その農民リーダーたち一人一人を脅し、圧力をかけている(注3)。

一方、モザンビークの農民たちは、これまで一貫して、自分たちの声を聞いてほしい、事業策定プロセスに「参加」したいと主張してきた。

なぜ同じ「参加」の話をしながらここまでずれ違いが生じるのか。後者の自らの社会における主権を求める声に対し、前者は、農民たちが「そこにいればいい」という技術的な話をしているにすぎない。事業実施者側がこの決定的な違いを理解できないがために、いま、農民たちは命の危険を感じながら闘うことを強いられている。JICAが提唱していた「参加型開発」も地に落ちたものだと思う。

今年2月の第15回意見交換会で上述の事実をすべて並べて状況確認したところ、JICAによれば「契約書の業務指示はあくまでも目安」であり、「すべては現地NGOのオーナーシップで進められて」おり、先の発言の「どこが虚偽かわからない」その通りである。

責任放棄も甚だしい。いったい誰の、何のための開発なのか。もはや怒りを通り越して、情けない気持ちになる。



1月に現地で開催された「対話ワークショップ」の最初の会合は2日間の日程で開催されたが、その終了前の2日目朝の段階で、「プロサバンナ事業の継続に条件付きで合意」という結論の記事が現地新聞の朝刊に掲載されていた。

◎注1: 声明→<http://ngo-jvc.info/1UWEGK2>、公開質問状→<http://ngo-jvc.info/1XrDvAi>

◎注2:<http://ngo-jvc.info/1XrDEna>、<http://ngo-jvc.info/1Wob0VN>、<http://ngo-jvc.info/1ViDEb9>など

◎注3: 注1の「声明」のP8f6. 小農の連帯・エンパワメントを損なうUNAC への介入・圧力・分断の促進

イベントあらかると

1月～3月

イベント・ピックアップ!

2/6(土)、2/9(火)、2/15(月)、2/25(木)
東京・JVC東京事務所

2016年度 JVC東京事務所インターン説明会

事務局次長 細野 純也

「春は出会いを別れの季節」と言いますが、JVC東京事務所です1年間いっしょに活動してくれた2015年度インターンも、3月で修了です。その集大成(?)として、4名のインターンが自らの経験を次年度インターンに関心のある方々にお伝えする説明会を開催しました。

ラオス事業インターンの加藤野の子さんは、以前からJVCのことを知っていたけれど、実際にインターンになって「自分が目指したい方向にピッタリ」と思えたと話しました。自身もカンボジアに関わる学生サークルで活動してきた経験もあり、ラオスなど別の地域に視野を広げようと考えての参加でしたが、農村地域での開発の根底にある考え方に触れ、農業により関心が深まって、卒業後の進路も農業関係を選択。参加者からも、「農業に対する情熱が垣間見えた」との声が聞かれました。

アフガニスタン事業インターンの竹村謙一さんは、定年退職後に非常勤のお仕事を続けながらインターンに参加。2015年度はアフガニスタンの現地スタッフの来日が3回もあったことで、アフガニスタンをより近く感じられたと話しました。来日に際しては、スタッフの休日のアテンドも一手に引き受け、アフガニスタンボランティアチームの皆さんも巻き込んで楽しんだ様子を写真をふんだんに使って紹介してくれました。スタッフよりも人生の大先輩でありながら、インターン制度を「弟子入り」と表現。何歳になっても新しい世界に一步踏み込むのは楽しい!と話してくれました。

パレスチナ事業インターンの鴨志田恵里さんは、「国際協力と言っても自分に何ができるのか…」と考えて、活動期間中にパレスチナ現地を訪れ、駐在スタッフと一緒に歩き語るなか

で、そのヒントを持ち帰ったそうです。そして今後は旅行業に従事することで、人びとと世界を結ぶ役目を担ってくれます。

広報インターンでホームページの更新に携わっていた清水春香さんは、インターン仲間と東京事務所スタッフへのインタビューを敢行。いったいどんな人がNGOに関わるようになるのだろう?との興味から始まったことですが、その感想は、何も特別な人たちではなかった、とのことでした。敷居が高そうだと思っていたNGO職員をもっと身近に、等身大の魅力として伝えたい、まさに広報スタッフとして、「伝えることの楽しさ」を心から感じるようになったのが一番の変化と話しました。

得られたことは人それぞれですが、みな自信を持って自分の一年間を伝えてくれたことに、受け入れたことを嬉しく思いました。



スタッフへのインタビューをする清水さん(写真左)。各スタッフの経歴や嗜好が赤裸々に暴かれているので、興味のある方はホームページをどうぞ!

その他の主なイベント

1/12(火) 東京・文京区

武力で紛争は解決できない
という事実から考える

1/27(水) 東京・中央区

紛争によって子どもたちの将来が
失われないように

1/30(土) 愛知県・名古屋市

戦争法とNGO
南スーダンPKOをめぐる

2/3(水) 東京・JVC東京事務所

NGOで働いてみて見えた理想と現実
協力隊からNGO職員へ
ラオス駐在初年度を終えて帰国した渡久山が、
青年海外協力隊派遣の経験も交えてNGOの現場
での活動についてお話ししました。

2/6(土) 東京・台東区

美味しいアフガン 厳しさの中の豊かさ
料理研究家の上野朱音氏を招いて、アフガニ
スタン料理を参加者と実際につくることで、アフガ
ニスタンの食文化と現在の状況についてお伝え
しました。

2/6(土) 東京・墨田区

スーダンを満喫 第3回
～作って、食べて、お話を聞こう～
スーダンの郷土料理を在日スーダン人のゲスト
といっしょにつくり、スーダンについてのお話を
伺いました。

2/6(土)～7(日) 大阪・大阪市【出展】

ワン・ワールド・フェスティバル
感じる・ふれあう・助け合う
世界につながる国際協力のお祭り

2/13(土)～15(月) 東京・千代田区

第15回 南北コリアと日本のともだち展
東アジア各国の子どもが描く絵を集めた絵画展
を他団体と共催で開催しました。今年で15回目
となります。同時に、昨夏に平壤を訪れた学生や
報道関係者、韓国からのゲストを招いてのイベ
ントも開催しました(本誌13ページ参照)。

2/27(土)～28(日) 宮城・気仙沼市

週末は気仙沼。
週末は気仙沼。
東日本大震災で津波の被害を受けた気仙沼市を
訪れ、現地の人との出会いを通して復興への取
り組みを実感するツアー。今年で4年目です。

3/12(土) 東京・港区

中東で感じたジレンマ 難民支援のリアル
中東支援に関わるNGOの共催で、支援現場で
感じた葛藤や希望をスタッフが語りました。

3/12(土) 新潟・新潟市

紛争とNGO 海外で活躍するあなたが、
知っておくべきこと

3/13(日) 新潟・新潟市

映画上映会 自由貿易と食料主権について
考える

3/20(日) 石川・金沢市

パレスチナ問題とNGO活動を学ぶ会

3/27(日) 東京・中央区

コミュニティの分断と再生
住民と共に悩み歩んだ5年間
東日本大震災の被災地(宮城県気仙沼市、福島
県南相馬市)におけるJVCの支援活動のこれま
でを振り返るイベントでした。

3/29(火) 千葉・千葉市

パレスチナ・ガザ戦争と日本のNGOによる
支援活動



できることから
やっつけていこう
JVC 会員 金森 史明



JVC と本格的に関わるようになったきっかけは、JVC の「タイの農村で学ぶインターシッピングプログラム」に参加したことです。僕は大学卒業してシステムエンジニアリングの会社の営業をやっていました。その後、「もっと世のため人のために働きたい」と思って別のNGOの東京事務所スタッフにもなりました。ですが「なんか違うなあ、もっと現場の暮らしを見てみたいなあ」と思っていたところにこのプログラムを知り参加しました。

タイの農村で約一年間生活してきて、途上国とか先進国とか、支援する側される側という捉え方だけではイマイチと感じました。それぞれの国にはそれぞれの課題や問題がある。むしろ、途上国の問題は日本を含む先進国が原因のこともあると感じました。日本を良くすることが、ほかの国の問題を解決することにもつながる、と思ひ至りました。そこから「もっと地に足をつけて暮らしたい、自分の足元を固めてそこから世の中をよくしていきたい」と考えるようになりまし

いま、僕は千葉県成田市で農業をやっています。以前よりも東京事務所に行くことは激減しました。しかし、タイからのスタディツアーの人たちに自分の畑を案内したり、東京事務所に通してJVCに関わるようになっています。

国際協力というと、海外の現地現場で働くことや東京事務所で作業のお手伝いをする、いろいろと寄付をすることをイメージされる方は多いです。そのイメージに、「自分のいるところで、自分の暮らしや仕事をする上でやれることをやる」ということも国際協力のひとつの方法だということをつけ加えてもらえるように、まずは自分自身が実践すべく試行錯誤中です。こういう国際協力のやりかたをする人（ひとりNGOとかNon Governmental Individualsとかいうそつです）が増え、さらにそういう人たちがつながってネットワークをつくることのできれば、世界をもっともいいものにしていくことができると信じて、今日も畑で種をまいています。



『風の波紋』
小林茂監督 / カサマフィルム製作 /
2015年 / 99分
農業ジャーナリスト 大野 和興



雪が深い。屋根のてつべんのところを、どう見ても80をだいぶん超えたばあちゃんがシャベルを手に持って、ひよこひよこ歩き、雪下ろしを始める。ふつ、とばあちゃんの姿が見えなくなった。「あれ落ちたか」と身を乗り出していると、雪の屋根に座り込んでうまそつに煙草を吸っている。画面が切り替わる。春、色が白一色から緑一色になり、その緑の中をヤギを積んだ軽トラが走る。

が目の前にあったので耕してみた。耕したら稲を植えなければと思った。放棄された田んぼを起すこと自体、難儀な労働なのだが、そんなことはおくびにもださない。いや、なかなか楽しいですよ、やっているうちに好きになって、アトですぬ。

映画の舞台は越後妻有の里。人口減少と高齢化の波が押し寄せ、耕作放棄地と空家ばかりが増える。一方で、田舎暮らしを望んで移住してくる人もいる。映画はその一人、木暮茂夫さんと連れ合いの孝恵子さんを軸に進行する。報道写真家だった木暮さんがこのむらに住んで14年。捨てられた田んぼを鋤て起こし、漬れかけた百姓家をもう一度生き返らせることに情熱を注ぐ。

譲り受けた百姓家の再生もそんな具合だ。東日本大震災と同じ時期、信越を襲った地震で傾いてしまった。もう駄目かなと思っただが、地元の大工の棟梁に見てもらったら、なに、簡単だよ、と言われた。その気になっってはじめてたらこれが難工事。それでも無事普請も終わり、一同揃つての寄り合い。酒が出て、棟梁が歌い出したのが「夜明けは近い」。演歌じゃないんだ。

いや、情熱じゃないなあ。なんとなく行きがかりでやっているというその脱力感がたまらない。狭い棚田に水を張って手植えする。植えながらぼそぼそ話す。捨てられた田んぼ

いろいろなエピソードを盛り込んで99分が過ぎていく。古いむらは時代の波の中で消えかけているが、新旧村人がまじりあって、新しいむらが動き出しているように見える。監督の小林茂さんが撮りたかったのは、この世界なのだなあと思ひながらゆっくり時間が流れる99分を堪能した。3月下旬から全国上映。

お知らせ

第17回 JVC 会員総会のご案内

年に1回、多くの会員の方々と一同に集える場である会員総会を今年も開催いたします。JVCの活動を通して世界各国の課題を共に考える場でもあります。

議案書は、別途6月初旬にお送りいたします。

日時 2016年6月18日(土) 10:00~13:00(予定)

会場 渋谷区 東京ウィメンズプラザ 視聴覚室

議案 1)2015年度活動報告および決算報告

2)2016年度活動計画および予算案

3)役員改選

例年と同様、総会終了後の午後に、「会員のつどい」を企画しておりますので、こちらをご参加ください。
参加される場合には昼食をご持参ください。

「冬の募金」報告

2015年「冬の募金」へご協力いただき、
ありがとうございました！ 指定寄付/無指定寄付すべてを含みます。

11月24日~2月29日集計

1,218件 11,276,782円

募金集計

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

| 指定先 | 期間(12~2月) |
|---------|-------------|
| 無指定 | 16,445,839 |
| タイ | 4,500 |
| カンボジア | 841,957 |
| ラオス | 203,511 |
| 南アフリカ | 93,778 |
| アフガニスタン | 833,127 |
| イラク | 105,749 |
| スーダン | 599,082 |
| パレスチナ | 1,224,803 |
| 南タイ | 1,502,180 |
| コリア | 67,285 |
| 東日本大震災 | 1,508,744 |
| みどり一本 | 165,446 |
| 東京管理 | 191,500 |
| 調査研究 | 444,500 |
| コンサート | 3,467,808 |
| 合計 | 27,699,809円 |

上表に「夏/冬の募金」も含まれます。

日本平和学会平和賞受賞

2015年11月28日、JVCは第5回日本平和学会平和賞を受賞しました。この賞は日本における平和研究、平和運動において大きな貢献をした団体および個人の功績を称え、平和運動、平和研究のいっそうの活性化を期し、設定された賞です。JVCは設立以来一貫して市民の立場から世界各地で地域開発・人道支援活動に尽力し、「積極的平和」の真の担い手としてめざましい活動をしてきたことが評価されての受賞となりました。これを励みにさらに職員一同全力投球いたします。

アンケートご協力をお願い

「まずは手にとってもらえるように」とデザインも刷新した本誌のリニューアルから1年が経ちました。つきましては、皆さまからのご意見をお聞かせいただきたく、アンケートを同封させていただきましたので、どうぞ協力の程よろしくお願いたします。

※回答先：会員担当 宮西 (FAX 03-3835-0519)
※インターネットでもご回答いただけます。URLは、会員担当から配信しているメールでご確認ください。

人事

入職



稲垣 美帆 カンボジア事務所現地調整員(1月18日付)
大学時代、普遍的活動である農と食に興味を持ち、卒業後、多種多様な人々と9か月間自給自足の生活を送りました。様々な違いを超えて人々が助け合い、共に楽しく生きるムーブメントをカンボジアからスタートします！



野辺地 和郎 ファンドレイジング担当(1月21日付)
民間企業にて36年間勤務。英国駐在時に多くの企業人がNGOに移り生き生きと活動している姿を見て、自身も新たなチャレンジとして国際協力に関わりたと思いました。企業での知識・経験をJVCで役立てたいです。

編集後記

嬉しい知らせがあった。私に関わるマレーシア・ボルネオ島では26の村を呑み込む巨大ダム計画があった。森に住む先住民は猛反発。2013年から村々の有志が泊まり込みで道路封鎖を敢行した。粘ること900日、ついに中止が決定。現場の踏ん張りを支えた一つは、ネットも活用した積極的な情報発信だ。海外の市民が関心をもちボルネオを監視する。正しく粘り強い情報は社会を変える。JVCの活動ももっと知らしめねば。今、私もその立場にいる。(樫)

TRIAL & ERROR

©丹葉暁弥



左から、レ・ロマネスクのTOBI(トビー)と、MIYA(ミーヤ)と、JVCの谷山。昨年7月に行った対談の様子はホームページでご覧いただけます。

うたう おどる わらう つなぐ ちきゅう はっぴー TiQNoKo(チキュノコ)プロジェクト CD『TiQNoKo』4/14(木)発売

前号で特集した通り、2015年7月にJVCは世界的ポップデュオ「レ・ロマネスク」とのコラボレーションプロジェクトを立ち上げました。いよいよ4月14日(木)CD『TiQNoKo』発売です。楽曲の売上はJVCの活動に役立てられます。ぜひ購入して活動を応援してください。



レ・ロマネスク
『TiQNoKo』1,000円(税込)
クメール語ver.(歌詞カードに読み仮名、日本語訳付き)とカラオケの2曲入り。お求めは、主要CDショップ、amazon、iTunes、またはJVC[担当:大村]までどうぞ!
TEL 03-3834-2388
MAIL info@ngo-jvc.net

レ・ロマネスク × 日本国際ボランティアセンター (JVC)
チャリティソング TiQNoKo(チキュノコ)プロジェクトの詳細は
下記のURLまたは、QRコードをご参照ください。
<http://www.ngo-jvc.net/campaign/lp/lesromanesques.html>

TiQNoKoプロジェクト詳細



今後のスケジュール

- 4/14(木) CD『TiQNoKo』発売
 - 4/20(水)~5/8(日) 渋谷ロフト1F特設コーナーにてCDが購入可能に。
 - 4/24(日) 発売記念ライブ&サイン会@渋谷ロフト(17時~)
 - 5/7(土) カンボジアフェスティバル2016@代々木公園にてライブ(13時~)
- *各日程については予定であり、変更になる可能性がございます。
*最新情報はJVCのホームページをチェック! <http://www.ngo-jvc.net/>

カンボジアで撮影した プロモーションビデオは こちらから!



『TiQNoKo』
レ・ロマネスクと
TiQNoKoコーラス隊(カンボジア編)



JVC 特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター(Japan International Volunteer Center)は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数(4月1日現在) 合計1,038名(正会員557名 賛助会員481名)

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。
メールアドレス miyanishi@ngo-jvc.net

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに
正会員と賛助会員があります

JVCのオリエンテーション(説明会)にお越しください

JVCの活動内容をご紹介します。
お気軽にご参加ください。

会場 JVC東京事務所 参加費 無料 予約 不要

第1月曜日 午後7:00~8:30
第2・第4土曜日 午後2:00~3:30

ウェブサイト <http://www.ngo-jvc.net/>

メールアドレス info@ngo-jvc.net

Facebook [NGOJVC](https://www.facebook.com/NGOJVC)

twitter [@ngo_jvc](https://twitter.com/ngo_jvc)

